



4-15図 佐倉市海隣寺の千葉氏の墓

昌胤

勝胤の亡きあと、子の昌胤がつぐ。小弓公方哀歌が義明、両武田氏、里見義堯などの上総・安房の軍と北条氏綱・氏康の率いる相模・武蔵の軍とが、太日川（江戸川）をはさんで対峙し、下総国相模台や国府台で戦った天文七年（一五三八）の第一次の国府台の戦いには、昌胤は後北条氏をたすけて従軍したといわれているが、詳細は明らかでない。結果は、後北条市の勝利に終わり、永正十四年（一五二七）に足利義明、両武田氏によってうばわれていた原氏の居城であった小弓城を取りかえすことができ、再び原氏をしてこれを守らしめた。この第一次の国府台合戦のあと、昌胤と後北条氏との間はかなり友好的な関係にあったと想像される。

これを物語る史料の一つに相模国の無量光寺にのこされている昌胤の書状がある。年次を欠いているので差出した時期はわからないが、天文七年以降、昌胤の没する天文十五年（一五四六）までの間の文書と考えられているものである。これによれば、当時、後北条氏の厚い庇護をうけていた時宗当麻派の無量光寺の住職である他阿上人が下総を遊行した時、昌胤を面会している。恐らく、本佐倉城に迎えられたのではなからうか。あるいは、本佐倉城下の海隣寺が同宗の寺院であり、ここに来山されたのかもしれない。文面をみると、この面会は昌胤にとって「満足至極」であり、遊行僧の本佐倉への派遣方をのぞみ、その「仰せを蒙る条、本懐の至り、快然に存じ奉り候」と記し、贈物の賞味を促している。他阿上人との交流は、とりもなおさず、後北条氏と同盟関係にあったことを暗示してくれる話である。ちなみに、昌胤は、天文十五年正月廿四日、年五二歳で卒し、海隣寺に葬られた。今日、佐倉市へ移されているが、同寺墓地に昌胤の法名である法阿弥陀仏と没年を刻んだ宝篋印塔が建っている。